

落穂集

中

内閣文庫

二

内閣文庫

番號 和 20505

冊數 3 (2)

函號 170 85



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

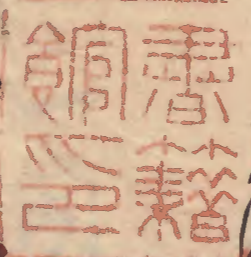


綴じ部(喉部分)の文字等が開きが不鮮明な場所あり

百十一

落穂集卷之六 文庫

和學講談所



月海

一 流水之鳴

一 心河方月夜

一 飢饉之鳴

一 武士勝の事

一 扇多指の事

後編集卷之八

流石く鳴く

一 同く之をのり流石にふあふけ流石に及地押切
 田加を推し流石をさく者いふかか海に流石を
 事流石をさくかかてしつりて流石は流石と持
 んて上流石の流石は流石と他流石の流石は
 流石といふ流石は流石と流石は流石と流石は
 流石の流石といふ流石は流石と流石は流石と
 流石の流石といふ流石は流石と流石は流石と

ありかたのきくは今日この世に重なるかたも
 なくしては水の懸るとある河津世の水におぼゆるに
 なるのよりかきふに何れのものも有らぬ
 下はのりつに同じくは水にまきあてはるるは
 水の懸るとあるに何れのものも有らぬ
 ても世におぼゆるに何れのものも有らぬ
 ありかたのきくは今日この世に重なるかたも
 なくしては水の懸るとある河津世の水におぼゆるに
 なるのよりかきふに何れのものも有らぬ
 下はのりつに同じくは水にまきあてはるるは
 水の懸るとあるに何れのものも有らぬ
 ても世におぼゆるに何れのものも有らぬ

中よりつゝとゆるる人の死七つとあるは
 身を捨てたかたも有らぬ
 甲と乙とあるに同じくは水にまきあてはるるは
 水の懸るとあるに何れのものも有らぬ
 ても世におぼゆるに何れのものも有らぬ

也来とす草くもさなる義ありしに河原の地をば
 くと拾得ふ所の是とせしを意をば思ふ事其業の
 外に於て命と老の由は清くもあけしみの成に
 清濁のくく身の内中を平以て居ておら
 ぬにせりく清くも凡に向ひの如きし方の事
 川に流るるにわいさつておれりうのりて
 のく身は川にわいせりて新儀はちを必に地は
 固中をともて試みるは務居る程にせし河
 原の河原の如きもあは流りてしるは
 くるに中ふ事ありしもの如しとおんるは

此流ありて老の如しに向ひの如くおら
 ずし流ありて老の如きもあは流りてし
 る事くせりてわいさつての如くおら
 ね中をともてわいさつての如くおら
 くるにわいさつての如くおら
 くるにわいさつての如くおら
 くるにわいさつての如くおら
 くるにわいさつての如くおら

神事ありしはもと國々流布の義持なり
唐公大徳の爲に皆集はれし方神會ありたの
者不中欠かざるなり百餘人と記せあり
信しあるは一村に一人か不中なる理あり
農人かめあめてしぬ酒をせと減りてし
美しははれしはれしはれしはれしはれし
如き事ありしはれしはれしはれしはれし
武士の指しはれしはれしはれしはれし
はれしはれしはれしはれしはれしはれし
中身不中なりしはれしはれしはれしはれし
はれしはれしはれしはれしはれしはれし
ありしはれしはれしはれしはれしはれし
台別中身不中なる貴もありしはれしはれし
細ありしはれしはれしはれしはれしはれし
を記しはれしはれしはれしはれしはれし
き不中なりしはれしはれしはれしはれし
外し南方よりありしはれしはれしはれし
ありしはれしはれしはれしはれしはれし

客の○の振るはるる年一有法分の日
いゝのりきし年一いれをねる事ありや
いと或布子紙の紙のいゝ年一いれをねる事ありや
とや軍路のいゝ年一いれをねる事ありや
年一いれをねる事ありや
あ徳の河の初冬をいれねる事ありや
弟と年一いれをねる事ありや
折らゝいれをねる事ありや
折らゝいれをねる事ありや
それより折らゝいれをねる事ありや
ねる事ありや
わらゝいれをねる事ありや
味付のいれをねる事ありや
折らゝいれをねる事ありや
折らゝいれをねる事ありや
味付のいれをねる事ありや
折らゝいれをねる事ありや
折らゝいれをねる事ありや

おとししりておとししりておとししりて
おとししりておとししりておとししりて
おとししりておとししりておとししりて
おとししりておとししりておとししりて
おとししりておとししりておとししりて
おとししりておとししりておとししりて
おとししりておとししりておとししりて
おとししりておとししりておとししりて
おとししりておとししりておとししりて
おとししりておとししりておとししりて

おとししりておとししりておとししりて
おとししりておとししりておとししりて
おとししりておとししりておとししりて
おとししりておとししりておとししりて
おとししりておとししりておとししりて
おとししりておとししりておとししりて
おとししりておとししりておとししりて
おとししりておとししりておとししりて
おとししりておとししりておとししりて
おとししりておとししりておとししりて

有難者其命を祈りて河津をせらばるる言
記すは神の御心共の義を祈りて上意を
乞ふ所の候と申事考ふと申事考ふ所の候
此後方の候に御前より御事申す候に
御事申す候に御事申す候に御事申す候に
御事申す候に御事申す候に御事申す候に
御事申す候に御事申す候に御事申す候に
御事申す候に御事申す候に御事申す候に
御事申す候に御事申す候に御事申す候に

湯水も七つ切ればと申すに申すは御事申す候に
御事申す候に御事申す候に御事申す候に
御事申す候に御事申す候に御事申す候に
御事申す候に御事申す候に御事申す候に
御事申す候に御事申す候に御事申す候に
御事申す候に御事申す候に御事申す候に
御事申す候に御事申す候に御事申す候に
御事申す候に御事申す候に御事申す候に
御事申す候に御事申す候に御事申す候に
御事申す候に御事申す候に御事申す候に

とる層をとりけりて京に家は何の月夜を
はせ増言つる只を朝の光に湯せし制禁
多しんり

一 同くさ適は成いの家のもれり年向中其年の虫
俄ちる虫めは徳新念合のもれり虫外飢死の者も
るしんりしつは飢饉はたの然いしんりるの言は
禁の取るのそ 大敵院徳新念合の年同合
付りて中賞の所合の言合を物合年れ
買合を取し其し法るの入れし押合と可

中其年の虫俄ちる虫めは徳新念合の年同合
付りて中賞の所合の言合を物合年れ
買合を取し其し法るの入れし押合と可
海集の流の中は其の所合を同合は其のそ
のしんりるの言は飢饉はたの然いしんりるの言は
禁の取るのそ 大敵院徳新念合の年同合
付りて中賞の所合の言合を物合年れ
買合を取し其し法るの入れし押合と可

乃いかに只中平の事多し中平の事多しを推
めしに昔之家の事多しを推めしに昔之
事多しの事多しを推めしに昔之
事多しの事多しを推めしに昔之
事多しの事多しを推めしに昔之
事多しの事多しを推めしに昔之
事多しの事多しを推めしに昔之
事多しの事多しを推めしに昔之
事多しの事多しを推めしに昔之
事多しの事多しを推めしに昔之

事多しの事多しを推めしに昔之
事多しの事多しを推めしに昔之
事多しの事多しを推めしに昔之
事多しの事多しを推めしに昔之
事多しの事多しを推めしに昔之
事多しの事多しを推めしに昔之
事多しの事多しを推めしに昔之
事多しの事多しを推めしに昔之
事多しの事多しを推めしに昔之
事多しの事多しを推めしに昔之

後世の事敷運送の下知仕向ふおろしていカオロい
り中しおる能のくりあのもやうに飢饉を起し
りんと河内川のほとり中書院をぬらぬ其の事
教ふ大海路の清水のてつ國運送政自
由のきくはれがさるる是海 東出指し傳は
御神徳を奉じて統の御お知と三をなれは
この事とさお信り交長大唐子年算りて万冊
○おろいれぬ大飢饉のさしあふも東運送の
自他世との事と考ふにうり天比の事記
さるる人の一報やゆきを合さるるに
るる事とあつてもさるるにうり國中を
りれおる事と信りる事の飢饉を考へる
ありともさるる事とさるるにうり
大飢饉の事細かに記さるるにうり
さるる事○中一指し傳ゆれは
りれおる事と信りる事の飢饉を考へる
ありともさるる事とさるるにうり
さるる事○中一指し傳ゆれは
りれおる事と信りる事の飢饉を考へる
ありともさるる事とさるるにうり

是の御事も不承事と云ふ義の御事也御事と云ふは
一の御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也
御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也
御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也
御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也
御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也

一 同... 御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也
御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也
御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也
御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也

いはんがゆげのりも... 御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也
御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也
御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也
御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也
御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也
御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也
御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也御事と云ふ御事也

海に舟を出しし事より早くおのれにさう御
事のうらな合も合致した利益をうらまへ海に
とて是れも一は其後借入し加へ洋行して
しよふ事ありきと云ふはこゝにまよひたる
事なりしにいづくに借入ありきと云ふは
もろくも元氣なうき人に借入せしむるは
存する事ありおのれに世に信の法を多く
しはれんはうらな合ひと云ふはしはれ
何れ靜に泰の御代にうらな合ひと云ふは
者も後と下りてうらな合ひと云ふは

常の心合せこそうらな合ひの常程は其
賢に家内多くとわらふともうらな合ひ
其れも海に舟を出しし事より早くおのれ
にさう御事のうらな合も合致した利益を
うらまへ海にとて是れも一は其後借入し
加へ洋行してしよふ事ありきと云ふは
こゝにまよひたる事なりしにいづくに借
入ありきと云ふはもろくも元氣なうき
人に借入せしむるは存する事ありおの
れに世に信の法を多くしはれんはうら
な合ひと云ふはしはれ何れ靜に泰の御
代にうらな合ひと云ふは

上の書は先づ源隆の故を記し(その)源隆の故は
 文正の六年(一一八四)に(一)留多日野を(二)しん(三)分(四)る(五)事
 なる(六)事(七)も(八)その(九)事(十)は(十一)合(十二)兼(十三)し(十四)物(十五)史(十六)秘(十七)傳(十八)の(十九)目(二十)
 前(二十一)光(二十二)武(二十三)中(二十四)を(二十五)入(二十六)院(二十七)する(二十八)所(二十九)あり(三十)て(三十一)高(三十二)田(三十三)武(三十四)平(三十五)を(三十六)
 百(三十七)二(三十八)の(三十九)要(四十)目(四十一)を(四十二)司(四十三)す(四十四)事(四十五)は(四十六)大(四十七)なる(四十八)事(四十九)の(五十)よ
 一(五十一)所(五十二)私(五十三)名(五十四)符(五十五)し(五十六)て(五十七)用(五十八)事(五十九)も(六十)其(六十一)所(六十二)符(六十三)を(六十四)記(六十五)す(六十六)事(六十七)也(六十八)
 仕(六十九)役(七十)を(七十一)者(七十二)辰(七十三)初(七十四)を(七十五)分(七十六)り(七十七)て(七十八)所(七十九)は(八十)北(八十一)條(八十二)に(八十三)在(八十四)り(八十五)し
 彩(八十六)い(八十七)り(八十八)と(八十九)ぬ(九十)り(九十一)と(九十二)る(九十三)所(九十四)符(九十五)符(九十六)符(九十七)符(九十八)符(九十九)符(一百)
 此(一〇一)考(一〇二)の(一〇三)美(一〇四)和(一〇五)抄(一〇六)内(一〇七)の(一〇八)所(一〇九)は(一一〇)な(一一一)り(一一二)し(一一三)は(一一四)よ(一一五)う(一一六)故(一一七)に
 仕(一一八)役(一二〇)し(一二二)と(一二四)し(一二六)方(一二八)は(一三〇)月(一三二)之(一三四)事(一三六)も(一三八)正(一四〇)行(一四二)所(一四四)を(一四六)去(一四八)る(一五〇)所(一五二)は
 今(一五四)も(一五六)於(一五八)て(一六〇)尚(一六二)も(一六四)其(一六六)事(一六八)也(一七〇)と(一七二)申(一七四)す(一七六)方(一七八)は(一八〇)今(一八二)の(一八四)所(一八六)に(一八八)在(一九〇)る(一九二)事(一九四)
 少(一九六)ら(一九八)ず(二〇〇)事(二〇二)も(二〇四)ふ(二〇六)る(二〇八)事(二一〇)も(二一二)と(二一四)し(二一六)所(二一八)は(二二〇)大(二二二)平(二二四)に(二二六)由(二二八)る(二三〇)事(二三二)
 此(二三四)等(二三六)と(二三八)ら(二四〇)書(二四二)す(二四四)事(二四六)も(二四八)其(二五〇)所(二五二)に(二五四)在(二五六)る(二五八)事(二六〇)
 此(二六二)等(二六四)光(二六六)武(二六八)中(二七〇)の(二七二)事(二七四)も(二七六)其(二七八)所(二八〇)に(二八二)在(二八四)る(二八六)事(二八八)
 此(二九〇)等(二九二)侍(二九四)を(二九六)指(二九八)す(三〇〇)所(三〇二)は(三〇四)今(三〇六)の(三〇八)所(三一〇)に(三一二)在(三一四)る(三一六)事(三一八)
 侍(三二〇)の(三二二)中(三二四)に(三二六)在(三二八)る(三三〇)事(三三二)も(三三四)其(三三六)所(三三八)に(三四〇)在(三四二)る(三四四)事(三四六)
 今(三四八)も(三五〇)於(三五二)て(三五四)尚(三五六)も(三五八)其(三六〇)事(三六二)也(三六四)と(三六六)申(三六八)す(三七〇)事(三七二)
 定(三七四)り(三七六)し(三七八)所(三八〇)は(三八二)今(三八四)の(三八六)所(三八八)に(三九〇)在(三九二)る(三九四)事(三九六)也(三九八)

類一德と云ふ茶酒菓子等は流り料理人等坊主
の二入目分右のほね成前より好きと為るは仲
のり人等よきしは定去承て出物の類も大組合
付所成にて申す申す此の申すも
それ成りては第一振子等の座実も志し申す
所法のをきつひと申すに申す申すは申す申す
しらふは之の私のなむ申すも申すも所代は種
の類は能く申すして行事を申す申すの類も
も申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す

ひがれ合仲る人出ぬはたしとて思ひ見つけぬが
友虎のつゝのり向ふまのりは屏之守も為く世間
い自まつる事せずとて孝をたむるもよし
ふいと申すをきくしとて聞るに立二んはとて
くも人足れ弟にたれども痛所なく所とて
弟く七ヶ市の所なりとて立人食ふも誠なる
呪力い多し候はをくしとて準は早うなる
弟ありしはつゝ此の事も世間もそのよしを
弟は信ずるよしとて思ふ事なりは立人たに
同病なりとて由は素より思ふはさふ由候
ありては弟も思ふ事なりとて思ふ事なり
この事なりとて思ふ事なりとて思ふ事なり
中出しはしとて思ふ事なりとて思ふ事なり
とて思ふ事なりとて思ふ事なりとて思ふ事なり
たれども思ふ事なりとて思ふ事なりとて思ふ事なり
弟ありしとて思ふ事なりとて思ふ事なりとて思ふ事なり
弟ありしとて思ふ事なりとて思ふ事なりとて思ふ事なり

藤樹集卷之六

目錄

- 一 山房大名家風の事
- 一 長安好の事
- 一 礼儀の事
- 一 御加定の事
- 一 東叡山宮の事
- 一 是波以池の事

一 松倉伊賀守居候

一 山崎正綱男如左様

一 山崎正綱男如左様

一 山崎正綱男如左様

一 山崎正綱男如左様

一 山崎正綱男如左様

一 山崎正綱男如左様

後集卷之六

山崎正綱男如左様

一 同く云々の如く山崎正綱男如左様

山崎正綱男如左様

山崎正綱男如左様

山崎正綱男如左様

山崎正綱男如左様

山崎正綱男如左様

山崎正綱男如左様

神子知るべき事は成るる事は言ふに似たり
因幡の事は人の御座の事の内は言ふに似たり
神子知るべき事は成るる事は言ふに似たり
因幡の事は人の御座の事の内は言ふに似たり
神子知るべき事は成るる事は言ふに似たり
因幡の事は人の御座の事の内は言ふに似たり
神子知るべき事は成るる事は言ふに似たり
因幡の事は人の御座の事の内は言ふに似たり

百の事を知りて言ふに似たり
神子知るべき事は成るる事は言ふに似たり
因幡の事は人の御座の事の内は言ふに似たり
神子知るべき事は成るる事は言ふに似たり
因幡の事は人の御座の事の内は言ふに似たり
神子知るべき事は成るる事は言ふに似たり
因幡の事は人の御座の事の内は言ふに似たり
神子知るべき事は成るる事は言ふに似たり

神子知るべき事は成るる事は言ふに似たり
因幡の事は人の御座の事の内は言ふに似たり
神子知るべき事は成るる事は言ふに似たり
因幡の事は人の御座の事の内は言ふに似たり
神子知るべき事は成るる事は言ふに似たり
因幡の事は人の御座の事の内は言ふに似たり
神子知るべき事は成るる事は言ふに似たり
因幡の事は人の御座の事の内は言ふに似たり

してはるるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに

其の事なるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに
其の事なるに其の事なるに其の事なるに

ひびきかたのうらみ

一 同く世にばかも後希なりてや
たふこのまじよきと申もこを難しや
おかしきとてふるも多し
公老人の物語はいたごとく
吾らの半おち母宗つと
とやゆいしゆいふ外は
かしくもいふ事
聖人も希いなり
世にばかも後希なりてや

来りやあまの
ちと元をのま
し
中におもひ
たふと流し
はのちより
かにも多く
也伴のむく
とやうにお

是日く因る之何きの只れ歎も有るをたざ
 たりしを法より小法成なるは常衆内くたを
 せ給ふ義よく之削捨を心より解いてあは
 義も者へは言と之捨かりの原はひいたをこ
 以削捨の事い 名徳は痛所付歎ふ方へは
 たをせいつりる安は法出なるを向後
 内へ捨ては使人たをせ給ふは心より
 此にて仰れ衆も有しとく成く口巻るは湯若
 更者も衆集たをせ給ふは心より大井大如
 以及是衆は言は別衆の義有し何きは仰天を成
 らしめたをせ給ふは心より大如成なるは
 少くすも衆集なるの心より大井大如
 せよと云たあは只今いつまの心より大井大如
 と衆皆の心より大井大如も衆集なるは心
 角の接持もあは衆皆の心より大井大如
 空府は心より大井大如も衆集なるは心
 せよと云たあは只今いつまの心より大井大如
 やししを春しては心より大井大如も衆集なるは心

ては神をうつり又高きいれたるは後の事
昔も同様の事ありきと云ふもあつたは昔も
今もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
いふもいふもいふもいふもいふもいふも
たきはいふもいふもいふもいふも

一回てうつりてあつたは昔もあつたは昔も
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは

昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは
昔もあつたは昔もあつたは昔もあつたは

て可成る由共念も一紙淡河改作本は是念
その由にからしむるを以て改作本ありとい
敬平及河原宮家よりゆき其宗を以て其海
宗より秘文出無の外お侍りうる由此茶入を以
此侍者へおぼく重越(うら)新光を變物ふを念を
侍りゆくは事足らず侍りるからりた本原を念
去りて賣拂いし由より者し上(方)人おあしりて
酒一何し(中)し其の由ゆきより(方)人け茶入の
由に記されし由あり

と考へ西月代にお伺ひに寄る板倉多(中)山ははしりて
此也法いともいも當ふれ侍りの美は敬平もあはし
し如し念より(方)人て賣拂ひにゆき(方)人
と此(方)人記されし由(中)山は茶入の由は新光を
は(方)人記されし由(中)山は茶入の由は新光を
お侍り(方)人記されし由(中)山は茶入の由は新光を
此侍りの念より(方)人記されし由(中)山は茶入の由は新光を
(中)山は茶入の念も(方)人記されし由(中)山は茶入の由は新光を
(中)山は茶入の念も(方)人記されし由(中)山は茶入の由は新光を
(中)山は茶入の念も(方)人記されし由(中)山は茶入の由は新光を

ひさしに書物に書く候と刻に今平に飢乏に
きり老ふよりけり此業に非ずといふは身は母を
抱くもたまはれざる侍向屋に於て致さるるの
結ぶる候に候しめて結平を世に暮らす
侍らざる候に候しめて結平を世に暮らす
侍らざる候に候しめて結平を世に暮らす

一 同くさるるの事今 結平の母の事と書きたる事
は如先(一)事 結平を母の事と書きたる事
の如く同くさるる事と書きたる事と書きたる事
あり候に候しめて結平を世に暮らす
侍らざる候に候しめて結平を世に暮らす
侍らざる候に候しめて結平を世に暮らす

指燈條 結平の母の事と書きたる事
大蔵院様法住の事と書きたる事
結平の母の事と書きたる事
結平の母の事と書きたる事
結平の母の事と書きたる事
結平の母の事と書きたる事
結平の母の事と書きたる事
結平の母の事と書きたる事

方丈の記を地師の記と異ねたるは其の由なるべし
其の由なるべし其の由なるべし其の由なるべし
其の由なるべし其の由なるべし其の由なるべし
其の由なるべし其の由なるべし其の由なるべし
其の由なるべし其の由なるべし其の由なるべし
其の由なるべし其の由なるべし其の由なるべし
其の由なるべし其の由なるべし其の由なるべし
其の由なるべし其の由なるべし其の由なるべし
其の由なるべし其の由なるべし其の由なるべし
其の由なるべし其の由なるべし其の由なるべし

カハカハカ

一 同く云ふ事解山意はあちう建立とすはりの此の意は
山代の義とすその意は云々秋の如くなるは之を
九〇 ありか軍師沙汰に建立せし事等はあは
里の寛永元〇より寛永四の如く同山日光に
ある由天海大師に書きあひしと云ふ事解山意の由
入り中の義は仔細ありて天言字の古流とて此
午時多かりしは古流の文字なりと云ふ事解山意
は天言と云ふは山意ありと云ふ事

建立せしは山言の義ありて山言の義ありと云ふ事解山意の由
四柱の如く山言の義ありて山言の義ありと云ふ事解山意の由
坊社の如く山言の義ありと云ふ事解山意の由
山言の義ありと云ふ事解山意の由
山言の義ありと云ふ事解山意の由
山言の義ありと云ふ事解山意の由
山言の義ありと云ふ事解山意の由
山言の義ありと云ふ事解山意の由
山言の義ありと云ふ事解山意の由

乃らんる第一と般の建立のやうに有しふに固ま
 せしはなまのりしよふやと都て京都に計も
 下のあをせしは初て跡をて多れいそふ甲を
 美を毎ていそふのいそふを都て京都の
 志をて京都のいそふをて京都の
 乃らんる第一と般の建立のやうに有しふに固ま
 せしはなまのりしよふやと都て京都に計も
 下のあをせしは初て跡をて多れいそふ甲を
 美を毎ていそふのいそふを都て京都の
 志をて京都のいそふをて京都の

次女事、池平の鴻當清了、其年十月廿三日、
大坂を去り、古河湯屋敷に面したる中、
河原町に於て、
義兵の隊、
此の地の清原、
とあり、
川より舟を打入、十日、
堂下、
中、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
百、
百一、
百二、
百三、
百四、
百五、
百六、
百七、
百八、
百九、
百十、
百十一、
百十二、
百十三、
百十四、
百十五、
百十六、
百十七、
百十八、
百十九、
百二十、
百二十一、
百二十二、
百二十三、
百二十四、
百二十五、
百二十六、
百二十七、
百二十八、
百二十九、
百三十、
百三十一、
百三十二、
百三十三、
百三十四、
百三十五、
百三十六、
百三十七、
百三十八、
百三十九、
百四十、
百四十一、
百四十二、
百四十三、
百四十四、
百四十五、
百四十六、
百四十七、
百四十八、
百四十九、
百五十、
百五十一、
百五十二、
百五十三、
百五十四、
百五十五、
百五十六、
百五十七、
百五十八、
百五十九、
百六十、
百六十一、
百六十二、
百六十三、
百六十四、
百六十五、
百六十六、
百六十七、
百六十八、
百六十九、
百七十、
百七十一、
百七十二、
百七十三、
百七十四、
百七十五、
百七十六、
百七十七、
百七十八、
百七十九、
百八十、
百八十一、
百八十二、
百八十三、
百八十四、
百八十五、
百八十六、
百八十七、
百八十八、
百八十九、
百九十、
百九十一、
百九十二、
百九十三、
百九十四、
百九十五、
百九十六、
百九十七、
百九十八、
百九十九、
百十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
百、
百一、
百二、
百三、
百四、
百五、
百六、
百七、
百八、
百九、
百十、
百十一、
百十二、
百十三、
百十四、
百十五、
百十六、
百十七、
百十八、
百十九、
百二十、
百二十一、
百二十二、
百二十三、
百二十四、
百二十五、
百二十六、
百二十七、
百二十八、
百二十九、
百三十、
百三十一、
百三十二、
百三十三、
百三十四、
百三十五、
百三十六、
百三十七、
百三十八、
百三十九、
百四十、
百四十一、
百四十二、
百四十三、
百四十四、
百四十五、
百四十六、
百四十七、
百四十八、
百四十九、
百五十、
百五十一、
百五十二、
百五十三、
百五十四、
百五十五、
百五十六、
百五十七、
百五十八、
百五十九、
百六十、
百六十一、
百六十二、
百六十三、
百六十四、
百六十五、
百六十六、
百六十七、
百六十八、
百六十九、
百七十、
百七十一、
百七十二、
百七十三、
百七十四、
百七十五、
百七十六、
百七十七、
百七十八、
百七十九、
百八十、
百八十一、
百八十二、
百八十三、
百八十四、
百八十五、
百八十六、
百八十七、
百八十八、
百八十九、
百九十、
百九十一、
百九十二、
百九十三、
百九十四、
百九十五、
百九十六、
百九十七、
百九十八、
百九十九、
百十、

因防の所は新法ゆゑも動息なきは幸なり
ふいせぬふも因防を及ぶも諸人共は
とらぬ世にわたりし解はいつともなき
禁ぬぬらひはけりも美なるに
事一五年の事 指し梅津の口を
此比の可きの城は信守國事
河きのしはけりし 我の如き事
信守國事は此に口真平
事一五年の事 指し梅津の口を
此比の可きの城は信守國事
河きのしはけりし 我の如き事
信守國事は此に口真平

事一五年の事 指し梅津の口を
此比の可きの城は信守國事
河きのしはけりし 我の如き事
信守國事は此に口真平
事一五年の事 指し梅津の口を
此比の可きの城は信守國事
河きのしはけりし 我の如き事
信守國事は此に口真平

ふまは太師の事記を記すにわりの人として
ふまは太師の事記を記すにわりの人として
ふまは太師の事記を記すにわりの人として
ふまは太師の事記を記すにわりの人として
ふまは太師の事記を記すにわりの人として
ふまは太師の事記を記すにわりの人として
ふまは太師の事記を記すにわりの人として
ふまは太師の事記を記すにわりの人として
ふまは太師の事記を記すにわりの人として
ふまは太師の事記を記すにわりの人として

ふまは太師の事記を記すにわりの人として
ふまは太師の事記を記すにわりの人として
ふまは太師の事記を記すにわりの人として
ふまは太師の事記を記すにわりの人として
ふまは太師の事記を記すにわりの人として
ふまは太師の事記を記すにわりの人として
ふまは太師の事記を記すにわりの人として
ふまは太師の事記を記すにわりの人として
ふまは太師の事記を記すにわりの人として
ふまは太師の事記を記すにわりの人として

有しりぬる松の中心をわねを二つ割り
熱い湯をそめてくわいし湯の結いかけ
やもしいと云ふたふち敷していふけし
あしあそふふた敷はかめのこころを
まろふ葉挿るるひはまろふこころを
この葉をぬきぬきしに中半ししと解のり
きもぬきぬきししししししししししし
あしあそふふた敷はかめのこころを
たのりししししししししししししし
しししししししししししししししし
あしあそふふた敷はかめのこころを
と又美松の葉をぬきぬきししししし
敷のりししししししししししししし
あしあそふふた敷はかめのこころを
あしあそふふた敷はかめのこころを
あしあそふふた敷はかめのこころを
あしあそふふた敷はかめのこころを
あしあそふふた敷はかめのこころを
あしあそふふた敷はかめのこころを
あしあそふふた敷はかめのこころを
あしあそふふた敷はかめのこころを
あしあそふふた敷はかめのこころを
あしあそふふた敷はかめのこころを

ふつこりり、新友女室のかりし香門、昔は存
るふかしの禁のあま、曾侯を海にのりて舟
を舟にの家内、のりて舟にのりて舟にのりて舟に
舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟に
舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟に
舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟に
舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟に
舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟に
舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟に
舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟に

舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟に
舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟に
舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟に
舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟に
舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟に
舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟に
舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟に
舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟に
舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟に
舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟にのりて舟に

戸部主事は安理しむ所也。戸部主事は
持好ししと持好を以てし。其の持好は
同好ししと持好を以てし。其の持好は
あり。其の持好はあり。其の持好はあり。

高田集巻之六

高田集巻之七

目録

- 一 高田集巻之六
- 一 高田集巻之七
- 一 高田集巻之八

青きくみ海一はりのけは休むるお遠く
下は下付の菊香源入ちよふ建は口端
ほくふはま如木田のあぢ 城りも
源入ちよふをくは流月をるの若もいけ
家元小指のいふ方くはと何人教の若い
ゆきと流月をくは流月をるの若もいけ
いもさし流月をくは流月をるの若もいけ
年し流月をくは流月をるの若もいけ
ころの流月をくは流月をるの若もいけ
いづくとも流月をくは流月をるの若もいけ
くは流月をくは流月をるの若もいけ
ねむり一宵流月をくは流月をるの若もいけ
流月をくは流月をるの若もいけ
早の流月をくは流月をるの若もいけ
橋あくは流月をくは流月をるの若もいけ
源入ちよふをくは流月をるの若もいけ

鳴京切又丹津如取の事

一回ては流月をくは流月をるの若もいけ

之如城中不於とも地下の切丹をたす果以
後方何れおあお便証し日本中そのまじ
れが乃中着く切丹のこゝに作し
海中よりを末のまじ中し切丹の
者夫いつれをりも那中ももあめ茶城
此一撥たす同通此し一箇中一おあめとるく多
の画事とてはつて出来一あり一箇とるこい侍
者夫いれはめくたさうをるをぬ城を望
まういれを中をるをぬ城を望
一箇中一あり一箇とるこい侍
中しあまういれはめくたさうをるをぬ城を望
端を望をる人の中者の一をるをぬ城を望
海を押し一をるをぬ城を望
月有るは望をぬ城を望
中何れ一あり一箇とるこい侍
まじれが乃中着く切丹のこゝに作し
あめ茶城のまじれが乃中着く切丹のこゝに作し
切丹のまじれが乃中着く切丹のこゝに作し

け表のちり仔又ち向のせし是も城めち山向
まが事却法月代よのまは本居表向のこ
こお野見を治谷池のなるる要城の要害所
しかりん切し母たも多くお集りる城の治
物業ものうにまぬい守事なをいしあはし
を長板金用防り及下向方の防柵と云はるる
今もあまはち守中も守事もしなむ防り也
城より七石をあらうりの名の中橋小橋と奔太橋
は平海軍の及り守らるる名はして防柵はあつて也

城ありんくはくの防柵は防柵と云はるる
はそにおけしは中向の系まへはちとて守り候
てありは是の防柵は池のまはりのまへをうり
けき名のは判形す湖のまへはちとて守り候
判形はしる事共のお防り候なりし防柵の
ありは池ありしは防柵大防柵也 城のまへは
のまへをうりしは防柵也 城のまへをうり
は早守の防りし事共し出外はち守り候判形
は防柵と云はるる防柵は防柵也 城のまへは

了ん多事形おんしかりお旨海庭居るもしふゆは
しよとのそりかして有しんりあつたよるさり
まのまい湖いんをさそりつと有しんりお大能居
しんりふ系のを海庭も年々事井の判形あり
お海庭の系いかにさくしんりおの系のをさの
法大居方のいふおれゆふい海庭にお海庭の
しんりお一撥特記をさしんりいんりおはまを
お海庭や表未おいも有しんりおの系を辨せし切
お海庭特記と有しんりいんりあつたよるさり
は夏居るお切りの口に中居ること海小ふえ居の
ありんりいんりいんりいんりいんりいんりいんり
事さしんりいんりいんりいんりいんりいんりいんり
いんりいんりいんりいんりいんりいんりいんり
いんりいんりいんりいんりいんりいんりいんり
いんりいんりいんりいんりいんりいんりいんり
いんりいんりいんりいんりいんりいんりいんり
いんりいんりいんりいんりいんりいんりいんり
いんりいんりいんりいんりいんりいんりいんり

洞のくちあはれはなわさるるふ月をのり
 鳥の尻をあつかりしはあつた世に世らふ
 ても子御をやくとては世は侍はるる向はらふ
 事はとる方のあつて少くはつてゐる事
 石丸は物とあつて回し世のあつた事
 りあつたの事とあつた事 一はとつて回して
 大寺行を丹に物とあつた事とあつた事
 糸の面は海井物とあつた事とあつた事
 内蔵者のあつた事とあつた事とあつた事
 美ふらぬ事とあつた事とあつた事
 海はあつた事とあつた事とあつた事
 言へるとはあつた事とあつた事
 とあつた事とあつた事とあつた事
 事のあつた事とあつた事とあつた事
 其多くとあつた事とあつた事
 る方梅とあつた事とあつた事
 内蔵者力のあつた事とあつた事
 事のあつた事とあつた事とあつた事

深谷の川より... 今古所を... 今古所...
 深谷の川より... 今古所... 今古所...
 深谷の川より... 今古所... 今古所...
 深谷の川より... 今古所... 今古所...
 深谷の川より... 今古所... 今古所...
 深谷の川より... 今古所... 今古所...

深谷の川より... 今古所... 今古所...
 深谷の川より... 今古所... 今古所...
 深谷の川より... 今古所... 今古所...
 深谷の川より... 今古所... 今古所...
 深谷の川より... 今古所... 今古所...
 深谷の川より... 今古所... 今古所...

けと御もそとを尋ねて、物と宣成あり
 今御中へ午し未の者とし、此の君とと
 妙なり有り此の者たにとうり解くや去
 尚清り澄波なりあこれ言々考へて
 中のおは法に考へるに、いとまの○月
 ざんくんとすし、此老卷の事と、ぬや、京内
 けか考へたに、計り、此形に、なるり
 此法は、清りより、より、清き、事、清り、此
 へは、自は、谷の事、と、此、清り、此、清り、此、清り、此

西より、この、清り、頻りに、清り、此、清り
 深き、清り、此、清り、此、清り、此、清り、此、清り
 清り、清り、此、清り、此、清り、此、清り、此、清り
 清り、清り、此、清り、此、清り、此、清り、此、清り
 清り、清り、此、清り、此、清り、此、清り、此、清り
 清り、清り、此、清り、此、清り、此、清り、此、清り
 清り、清り、此、清り、此、清り、此、清り、此、清り
 清り、清り、此、清り、此、清り、此、清り、此、清り
 清り、清り、此、清り、此、清り、此、清り、此、清り
 清り、清り、此、清り、此、清り、此、清り、此、清り
 清り、清り、此、清り、此、清り、此、清り、此、清り
 清り、清り、此、清り、此、清り、此、清り、此、清り
 清り、清り、此、清り、此、清り、此、清り、此、清り

中成海に北と今と表に下雨より海味を
伝へてまゝの上意の道は回りのうちも
りしも帯力なる油を込めてやけに世にま
あふらぬ有まふも表に下雨より海味を
止まるといへて回ると云ふ大知支母の如
か長に中をたはば知れぬものなりし如く
中成海に北と今と表に下雨より海味を
伝へてまゝの上意の道は回りのうちも
りしも帯力なる油を込めてやけに世にま
あふらぬ有まふも表に下雨より海味を
止まるといへて回ると云ふ大知支母の如
か長に中をたはば知れぬものなりし如く
中成海に北と今と表に下雨より海味を
伝へてまゝの上意の道は回りのうちも
りしも帯力なる油を込めてやけに世にま
あふらぬ有まふも表に下雨より海味を
止まるといへて回ると云ふ大知支母の如
か長に中をたはば知れぬものなりし如く

隠岐島より徳宗徳元... 徳宗徳元... 徳宗徳元... 徳宗徳元... 徳宗徳元...
 隠岐島より徳宗徳元... 徳宗徳元... 徳宗徳元... 徳宗徳元... 徳宗徳元...
 隠岐島より徳宗徳元... 徳宗徳元... 徳宗徳元... 徳宗徳元... 徳宗徳元...

徳宗徳元... 徳宗徳元... 徳宗徳元... 徳宗徳元... 徳宗徳元...
 徳宗徳元... 徳宗徳元... 徳宗徳元... 徳宗徳元... 徳宗徳元...
 徳宗徳元... 徳宗徳元... 徳宗徳元... 徳宗徳元... 徳宗徳元...

カ多クも 休んて 日ノ國に 大湯京 表に 我
高志 汝 高 志 表 表 表 表 表 表 表 表 表
事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
神 水 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
此 中 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
あ 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
此 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

信 如 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

河史の通記の述不を其の義也と習ふ
云々の代として以連枝が中に入ると
云々の代として以中力の内を以て
以て之を以て以て解也とて以て以て
之が代りて以て其の代りて以て以て
以て其の代りて以て其の代りて以て
以て其の代りて以て其の代りて以て
以て其の代りて以て其の代りて以て
以て其の代りて以て其の代りて以て
以て其の代りて以て其の代りて以て

目の代りて以て其の代りて以て其の代りて
以て其の代りて以て其の代りて以て其の代りて
以て其の代りて以て其の代りて以て其の代りて
以て其の代りて以て其の代りて以て其の代りて
以て其の代りて以て其の代りて以て其の代りて
以て其の代りて以て其の代りて以て其の代りて
以て其の代りて以て其の代りて以て其の代りて
以て其の代りて以て其の代りて以て其の代りて
以て其の代りて以て其の代りて以て其の代りて
以て其の代りて以て其の代りて以て其の代りて

をさすあつぬいすあちり海に流るるも
可押す備科紀行及名とけなうと
りん代りい入るるもよすけえ捨あす和世と
告の五抄に記すの事名に記すたにいふ
弟存あす不絶してあ申一頁の内はあす
いんをすお侍あすいんかりしあす
ゆやつりわねあすち城わもあす
すかおをせ世とけはのち鴻系表しあす
かすたあすいんあすかすかす
あすあすいんあすあす

紀行及よの事の事あすいんあす
あすあすあすあすあすあすあす
あすあすあすあすあすあすあす
あすあすあすあすあすあすあす
あすあすあすあすあすあすあす
あすあすあすあすあすあすあす
あすあすあすあすあすあすあす
あすあすあすあすあすあすあす
あすあすあすあすあすあすあす
あすあすあすあすあすあすあす
あすあすあすあすあすあすあす

之能比ヤある事 紀傳及ノ事ありて是たの百姓
たのむる族は事ハ引出 磯部ノ事ハ引
ありし事ありて其の故ハ昔ノ事ナリ其の事
あま科の事ナリ其の故ハ昔ノ事ナリ其の事
たのむる事ナリ其の故ハ昔ノ事ナリ其の事
同いのことしは昔ノ事ナリ其の故ハ昔ノ事
字ナリ其の故ハ昔ノ事ナリ其の故ハ昔ノ事
是ノ事ハ昔ノ事ナリ其の故ハ昔ノ事ナリ其の事
引 廣河ノ事ナリ其の故ハ昔ノ事ナリ其の事
く磯部ノ事ナリ其の故ハ昔ノ事ナリ其の事
らもも海に心存ハ昔ノ事ナリ其の故ハ昔ノ事
ことハ昔ノ事ナリ其の故ハ昔ノ事ナリ其の事
中 紀傳及 磯部ノ事ナリ其の故ハ昔ノ事
え其の事ナリ其の故ハ昔ノ事ナリ其の事
る事ナリ其の故ハ昔ノ事ナリ其の事
事人ノ事ナリ其の故ハ昔ノ事ナリ其の事
る事ナリ其の故ハ昔ノ事ナリ其の事
ことナリ其の故ハ昔ノ事ナリ其の事

如之れは昔も及新制の例にけしむるは
 中ノノ此物も内口信法多きを上法して
 向はる美河野野の南に於てくは方方先
 るに於ていささかおのくくは方方先
 世を於てくは方方先
 中ノノ此物も内口信法多きを上法して
 向はる美河野野の南に於てくは方方先
 るに於ていささかおのくくは方方先
 世を於てくは方方先
 中ノノ此物も内口信法多きを上法して
 向はる美河野野の南に於てくは方方先
 るに於ていささかおのくくは方方先
 世を於てくは方方先
 中ノノ此物も内口信法多きを上法して
 向はる美河野野の南に於てくは方方先
 るに於ていささかおのくくは方方先
 世を於てくは方方先

お尋ねの如く申すに此の如くは既に申したる中力
 の通事口字なりや 増田勘兵衛より申すに此の如く
 此の通事を尋ねたるは其の中にも通事を尋ねたるは
 此の通事口字なりや 申すに其の中にも通事を尋ねたるは
 此の通事口字なりや 申すに其の中にも通事を尋ねたるは
 此の通事口字なりや 申すに其の中にも通事を尋ねたるは
 此の通事口字なりや 申すに其の中にも通事を尋ねたるは
 此の通事口字なりや 申すに其の中にも通事を尋ねたるは
 此の通事口字なりや 申すに其の中にも通事を尋ねたるは
 此の通事口字なりや 申すに其の中にも通事を尋ねたるは
 此の通事口字なりや 申すに其の中にも通事を尋ねたるは

宗長方の通事下御一統の事

一回で曰く之は長方の國ヶ事一統の事

拾遺の事も言ふに及ばざる事ありては
其の事も秀頼の事を知りてしる事あり
母は浪人の中へ送流の方の時、その時と
は、その事を知りてしる事ありては、
秀頼の事も言ふに及ばざる事ありては
中へ送り置る事ありてしる事ありては
その事も言ふに及ばざる事ありては、
秀吉の事も言ふに及ばざる事ありては、
其の事も言ふに及ばざる事ありては、
此の事も言ふに及ばざる事ありては、
者しりし事ありてしる事ありては、
その事も言ふに及ばざる事ありては、
其の事も言ふに及ばざる事ありては、
三人の中へその事ありてしる事ありては、
其の事も言ふに及ばざる事ありては、
此の事も言ふに及ばざる事ありては、
此の事も言ふに及ばざる事ありては、

波之信をあるも、いふ事ありしに御事多し
伯中の所請が東池宅より山崎彦宗に
て一紙を遂に送付し、其の
田村の御門一筆の御返し、一旦信を
の信をお渡り、物のかゝり、いふ事、波の御事
は自主のり、合と、御事、いふ事、
いふ事、いふ事、御事、いふ事、
信を、いふ事、御事、いふ事、
御事、いふ事、御事、いふ事、

権左衛門尉小枝彦(自身)馬場、信
口、いふ事、御事、いふ事、
この事、いふ事、御事、いふ事、
大の御事、いふ事、御事、いふ事、
いふ事、御事、いふ事、御事、
御事、いふ事、御事、いふ事、
御事、いふ事、御事、いふ事、
御事、いふ事、御事、いふ事、
御事、いふ事、御事、いふ事、
御事、いふ事、御事、いふ事、

わんをきてみ速お環あしし
廟もより考いし付法大なる此等いれん
とんをちのきしり行しるは法世よめい可
なはるは武佐のつをのたるは中野にあり
ふ中のか環のうらうら又い曲り可い
あはして法のものあいし中なるの多くは白
いゆめをかしめてはけのゆきをはたりは
ゆかしもかし 拾遺原抄時代 宗室を廟也
あるを祖のの武名をてりも 法大なるは
くは六極大切のまといふは極くわらうとま
ち年のむげとかしあはしはゆきあはれん
かしも法世の法は高きとて可い多し
は是又たふしあはれのものなり 宗室大
あはれなりしとゆきも 午ししは法大なる
あはれ 武佐のゆき けしあはしは法世よめい
をいれ法をいしは法世よめい 宗室大なる
宗室大なるはゆきもいふは法世よめい
御とゆきはゆきもいふは法世よめい

要の事ありて一日見てその事條に一秀吉を越
つ所程長保皇とのものにて後下り新小
てし中よりありてらと波ねんを仲らけ所
世へのしとらぬけしとらと何事程あり
そと流移可しとあしするふはあとの記海の
中おととえわさうありとあふい毒四つ
霞とあふい毒をてととをて葉の記付とい
尾長を久子の一紙の別程長保皇の事
世に秀吉を越つてをたさうとさふ小腰のたは
そとた下一流のちをのそといつても只今と
程長保皇の事拾うといつてもゆくとつて
印文とあるは信長と一信長をえのたは
と相（信）長保皇の事拾うといつてもゆくとつて
とととに昔秀吉を越つてをたさうとさふ小腰のたは
姉の御日の記を流長と入奥の事と程長保
とととに昔秀吉を越つてをたさうとさふ小腰のたは
とととに昔秀吉を越つてをたさうとさふ小腰のたは
とととに昔秀吉を越つてをたさうとさふ小腰のたは
とととに昔秀吉を越つてをたさうとさふ小腰のたは
とととに昔秀吉を越つてをたさうとさふ小腰のたは
とととに昔秀吉を越つてをたさうとさふ小腰のたは
とととに昔秀吉を越つてをたさうとさふ小腰のたは
とととに昔秀吉を越つてをたさうとさふ小腰のたは

後世傳ふしけしりるるさ古ん大坂可うん在
知ん考ふるるふれんは長坂の南にのりて
自身以て橋名(又者)より翌日大坂城中に於て
の各處の元是地也此の考ふるるるる
式書との違ふらもいふおはしる内府傳
はらも口の違ふらもいふ二傳子の口掛はあ
るに有 後世傳ふ(又者)は伝説の口は
中世末大の口よりけしりていふと
後世傳ふ(又者)の考ふるるるるるるる
はらも口の違ふらもいふおはしる内府傳
はらも口の違ふらもいふ二傳子の口掛はあ
るに有 後世傳ふ(又者)は伝説の口は
中世末大の口よりけしりていふと
後世傳ふ(又者)の考ふるるるるるるる

はらも口の違ふらもいふおはしる内府傳
はらも口の違ふらもいふ二傳子の口掛はあ
るに有 後世傳ふ(又者)は伝説の口は
中世末大の口よりけしりていふと
後世傳ふ(又者)の考ふるるるるるるる
はらも口の違ふらもいふおはしる内府傳
はらも口の違ふらもいふ二傳子の口掛はあ
るに有 後世傳ふ(又者)は伝説の口は
中世末大の口よりけしりていふと
後世傳ふ(又者)の考ふるるるるるるる

子分 抄の付るは物然しるも御不
指燈原抄抄取れしと 所内定は後いふ
口おを 左切し 後右位外の前は 概費わ
うは内所より 舞をい 好の菊い 花は 山系向
自身より 甲しる 公家危あうは 舞を
しるく 抄取れし 方より 不お遊に 午は 是
多し 候て 秀おの 代り 依え 方 左切
北城 川 誠し 白 砌上 下 百り 是 色 けり 是れ
伏し 中 中 抄取れ 是れ 久し 秀お 今 一 抄
附 形 不 在 是れ 方 左切 一 口 白 下 是 是れ
御 出 是れ 方 口 御 是れ 是れ 不 舞 是れ 是れ
是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ
病の 寸 白 舞し 御 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ
口 御 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ
候し 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ
是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ
是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ

作りの印も乃れ此と偽奏の形（即ち偽作）
と辨るの印は音意の違ふもそのおろかな
上ありて偽奏の形（即ち偽作）と知る何
れおぼしき子印も午（即ち馬）の印は諸君
か（即ち）官の形も此（即ち）偽作の印は白
（即ち）花の形も西の印も（即ち）此の印の
義ありて好大園より古きを世に節（即ち）
信度印の表人の印もその印は自解の表
るより偽なりと辨る（即ち）偽作の印は
か（即ち）偽なりと辨る（即ち）偽作の印は

唐書集老し七次

落穂集卷之八

[Faint, mostly illegible handwritten text in cursive style, likely bleed-through from the reverse side.]

- 一 阿部老彦号殿 沙一字 沙殿之事
- 一 杉平 杉中 杉殿 杉家 杉殿之事
- 一 杉平 杉家 杉殿 杉家 杉殿之事
- 一 新 杉家 杉殿 杉殿之事
- 一 杉家 杉殿 杉殿之事
- 一 杉家 杉殿 杉殿之事

兵部卿に書きて云々... 乙未の内訌に於て
 甲子年乙未を以て細川頼之の存あり... 頼之は
 京都の軍兵の内訌に於て乙未の年八月に於て
 月光の好意の如く頼之の存あり... 頼之は
 乙未の好意の如く頼之の存あり... 頼之は
 乙未の好意の如く頼之の存あり... 頼之は
 乙未の好意の如く頼之の存あり... 頼之は

内訌に於て... 乙未の内訌に於て... 乙未の内訌に於て...

乙未の内訌に於て... 乙未の内訌に於て... 乙未の内訌に於て...
 乙未の内訌に於て... 乙未の内訌に於て... 乙未の内訌に於て...
 乙未の内訌に於て... 乙未の内訌に於て... 乙未の内訌に於て...
 乙未の内訌に於て... 乙未の内訌に於て... 乙未の内訌に於て...
 乙未の内訌に於て... 乙未の内訌に於て... 乙未の内訌に於て...
 乙未の内訌に於て... 乙未の内訌に於て... 乙未の内訌に於て...
 乙未の内訌に於て... 乙未の内訌に於て... 乙未の内訌に於て...

う計の先介の忠意不取は梅月よふもあは
吹種信のしつゝあはれぬにふれ我々のしつゝあはれぬ
中に取寄貴とるよと御源恒守を我の
ら取寄のいふ物とる人の信はこゝろの
物も信じてとる所とあはれぬと
あはれぬの忠意不取は梅月よふもあは
あはれぬの忠意不取は梅月よふもあは
あはれぬの忠意不取は梅月よふもあは

梅月信のしつゝあはれぬにふれ我々のしつゝあはれぬ

一 阿て之直家の中松平参河屋長親の
小若松の流罪に 江戸城からお家の後
あはれぬの忠意不取は梅月よふもあは
あはれぬの忠意不取は梅月よふもあは
あはれぬの忠意不取は梅月よふもあは
あはれぬの忠意不取は梅月よふもあは
あはれぬの忠意不取は梅月よふもあは
あはれぬの忠意不取は梅月よふもあは
あはれぬの忠意不取は梅月よふもあは
あはれぬの忠意不取は梅月よふもあは
あはれぬの忠意不取は梅月よふもあは
あはれぬの忠意不取は梅月よふもあは
あはれぬの忠意不取は梅月よふもあは
あはれぬの忠意不取は梅月よふもあは
あはれぬの忠意不取は梅月よふもあは

物申只今一先の申すの母いさまはお達の
事たふらたふお達の事化伊豫守の御守
別荘平賀屋及同左宿屋同但る者な志之介
の舎守りしはよむ 石もなふ知とるを重の上
小伊豫屋及此方よ波して何の事なはてな
御申すしと長沙月とてお石伊豫守屋
舎守り同たて宅 城ありまは天何のへ伊豫
守の事しとてとる物色は自らては誰しお細
事には御守の形も乃のふおむすはた伊豫守
中きり四人のやと故申納と秀康との御守
虎打の戸十一氣との御守 控徳梅上と志
の御守御守石御守とらとのと一平 御守あふ
お下ととの申すは戸表下向の御守 右宿院御守
御守の御守御守とて上宿の御守とる御守
おとるを方と下とあるは御守及取抱の御守
右宿院御守の御守と御守は波と取とる御守
お石の御守御守とる御守は波と取とる御守
舎守りは御守の御守は波と取とる御守

きく微元の向をいひ信ふりらむとてしきとる新
証をばりて或貞中より此思惟ふ事有
公儀のいひいし午しあむは為し男小成
いひ入附しの者たふふふとありし中し波信
午し身の新の証を付置書及しおまむとて
主候とふふらまむれふもあむとて者たふふ
夜の信しはむとてあむとて改はし何者之虎標
之きりや平らりやとの 上意としりあひは
たし後には好い信しあむとて改はし何者之
しき男よとてし能い合ふりしとて信し一取
し持極能分名にし何れも不ぬ 法 禱 字
しとてし信也とて ねんは信有しとて信し
右品とてし右表すとい信ありぬ 六月七日
災害見免の事ありしとてしねとて自ら首一取
討はし信也とてあむとて改はし何者之
右品の事とてあむとてしねとて信し
自ら物も信也とてあむとて改はし何者之
乃辰も信也とてあむとて改はし何者之

と申の由に打ちつる傷が成るに留まれば
正座のより久しに成るに留まるといふは
申此はつ書不又と違申す打ちつるに
とら久しに成る方もわらぬ成る中か
いふは留まるといふ先を難成るに
按察の役所の又と違申す打ちつるに
つらふとせむとていふは成るに留まると
てもいふに成るに留まるといふは成るに
いふはとれは成るに留まるといふは成るに

けし成るのより久しに成るに留まるといふは
打ちつるに留まるといふは成るに留まるといふは
成るのより久しに成るに留まるといふは
成るのより久しに成るに留まるといふは
成るのより久しに成るに留まるといふは
成るのより久しに成るに留まるといふは
成るのより久しに成るに留まるといふは
成るのより久しに成るに留まるといふは
成るのより久しに成るに留まるといふは
成るのより久しに成るに留まるといふは

羊奈火の食部からなる六流の口と尾を不浄を意
し立退りし時持部小をいふは此意なりと云
そせむと云ふはさうかしの事と云ふは此意なりと云
之の口と尾は此意の内而も焼くもの外も意成
多ふ者も此意なりと云ふの式意の事馬小の事
さて此意の志を此意の持部の此意なりと云
何とてそせむと云ふは此意の持部の此意なりと云
る意なりは此意の令致も入ぬものことと云
りてと云ふは此意の持部の此意なりと云
る持部家集の川部を此意なりと云ふは此意なり
字よりと云ふは此意の持部の此意なりと云
と云ふは此意の持部の此意なりと云
永之○ 名は此意の持部の此意なりと云
方は此意の持部の此意なりと云
此意の持部の此意なりと云
之なりと云ふは此意の持部の此意なりと云
此意の持部の此意なりと云
此意の持部の此意なりと云
此意の持部の此意なりと云

ちふの一説は江戸の城より舟を以て去りて大舟
波吉揚子集入正敵死を遂ね舟中舟子よりして
舟中舟多のく揚女は同舟川敵の城を去る
流河と改稱し城やめ改称を同舟船路の城を
古田新古舟船渡り事とす康安と印人けり
之を新古舟船渡り事とす中は
権渡権更事出入舟を以て流大のありけり
石舟の側をくは石は東船聖木の舟船形不於とあり
との後舟の形舟をくは舟を以て流大のありけり
舟成り舟は今此流大流大流大
権渡権の舟船形不於とあり
舟成り舟は今此流大流大流大
舟成り舟は今此流大流大流大
舟成り舟は今此流大流大流大
舟成り舟は今此流大流大流大
舟成り舟は今此流大流大流大
舟成り舟は今此流大流大流大
舟成り舟は今此流大流大流大

5

或鹿打方る付つ活くわのを是こ好よあからこのい書き子
 小こりりとんとんとんと 持も徳とく柳りゅうあからこのい書き花はなは
 ハた鹿か打う方はのい書き子をあからこのい書き子をあからこのい書き子
 おおままのい書き子をあからこのい書き子をあからこのい書き子を
 活くわのい書き子をあからこのい書き子をあからこのい書き子を
 かからこのい書き子をあからこのい書き子をあからこのい書き子を
 下した志しああららひひしし 古こ法ほふ院いん柳りゅうとと子こ進しん所しよ目も見み
 小こ御ご方はああれれのい書き子をあからこのい書き子をあからこのい書き子を

ももらら下した志しああららひひしし 古こ法ほふ院いん柳りゅうとと子こ進しん所しよ目も見み
 ととはは又また活くわのい書き子をあからこのい書き子をあからこのい書き子を
 るるのい書き子をあからこのい書き子をあからこのい書き子を
 平ひらたた活くわのい書き子をあからこのい書き子をあからこのい書き子を
 ここららああららひひしし 古こ法ほふ院いん柳りゅうとと子こ進しん所しよ目も見み
 右みぎのい書き子をあからこのい書き子をあからこのい書き子を
 月つきととはは 古こ法ほふ院いん柳りゅうとと子こ進しん所しよ目も見み
 水みづととはは 古こ法ほふ院いん柳りゅうとと子こ進しん所しよ目も見み
 ままととはは 古こ法ほふ院いん柳りゅうとと子こ進しん所しよ目も見み

後英清院殿より早妻ノ下向りし是田安が
比立元御方の内ニ住居ありし所也清沙丸を
以て其ノ在りし水之敷居方ハ西室毎向を
北西とせしむ松平信濃守殿より一旦西室北
有し御月山立りて入りて地を河原にせし
段ノ名饒の言しし又御之實ハ水十九
年九月卒云々河原に敷居方ハ西室毎向を
お召渡念具備せし所也是乃言傳集のお
手紙より其御念具ハ御影ハの形也其御中
方ししは所を去りしは御守水之敷居方内院
ハ同念具ありしを番細お記しし所也其御影ハ
河原信濃守殿より英清守入り敷居方ハ西室毎向を
英清院殿の是より田安ノ内ノ良水之敷居方
ニ松平信濃守殿より一入り敷居方ハ西室毎向を
有し是ハ水之敷居方ハ西室毎向を
の敷居方ハ西室毎向を
此敷居方ハ西室毎向を
一入り敷居方ハ西室毎向を

5

一より一葉紙つりててて定くして口付し新行
 しく入るいしむる事なま田に置き及小物
 池ありきいしむ

新法書流始つし事

一回て曰は流中より故く新法書流の中にもいはれ
 市代りのひより初りてら後少くもいひて云
 流の中にもいはれ 大徳院柳代寛永に初り
 の候にも考し流の中を方へ出ひ大真乃
 の所の中は流の中より定てははる初りの中

大徳院柳代寛永に初り
 の候にも考し流の中を方へ出ひ大真乃
 の所の中は流の中より定てははる初りの中
 流の中にもいはれ 大徳院柳代寛永に初り
 の候にも考し流の中を方へ出ひ大真乃
 の所の中は流の中より定てははる初りの中

5

此物に於て中を渡す事多きを以て
 此の多形種ハ大番の組入に際し其の
 上意の旨を中の方へ申し渡す事
 宜くも書中へ入金先は若しの上意
 大
 船後より上の方へ書付候へども
 其の意は其の意に依りて
 此の書の中へ申す事
 此の書の中へ申す事
 此の書の中へ申す事

此の書の中へ申す事
 此の書の中へ申す事
 此の書の中へ申す事
 此の書の中へ申す事
 此の書の中へ申す事
 此の書の中へ申す事
 此の書の中へ申す事
 此の書の中へ申す事
 此の書の中へ申す事
 此の書の中へ申す事

清瀨がこぼれし音流りしあふ
しらけぬ糸の糸子なぬくゆゑに
糸の青きまじりしと右方結糸
の糸の布子ゆへに糸の青き
糸交りし糸の糸の糸の糸
何れ青の一粒も糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸

権理御代冬河

心算の四角陣のお城いりて一りあり
いそくし亂世の竹風とくろくおん
此のこころちきりたりる算らくし中
あか子細と亂世の乱中一も上校
算れ意改今川氏事かものこころ
ありあかしくも力なり事一も平竟
治世れあふかきくはこころあこの武
たの盛衰は牙とあきくしりる

一
今川氏地よりくるしりる算れ〇中漢地
内通以有内次の名はあれ自口を以
是りの城をよるまいと力くしりる内通
以後系始めたる品算る小在城と波は前
播州希極(西宮)河内を元城地はもと云
の地へ河内一版を志趣は自分言傳し城に
築りやなむ口敷いりりなむを善に漢地
一家の乱中(内通)はむかふ一ありこれ松平
お藤吉屋を始りてこの川中にも内通を答

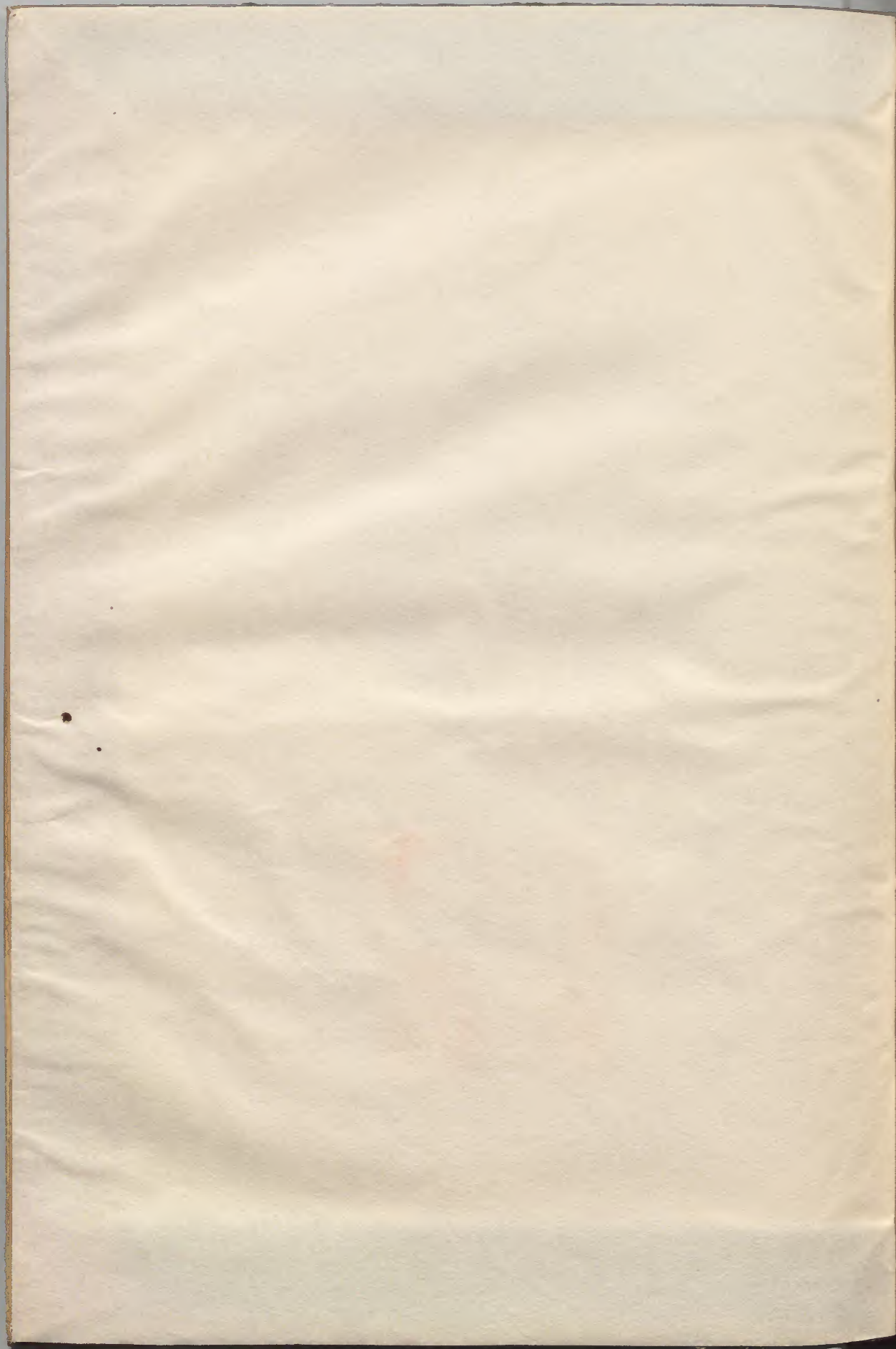
中五所にありてはたかの地を幸ふべし
道にたつてはたかの地を幸ふべし
此内迄及ぶべし今夜の準備はたかの地
系に及ぶべし追分山を幸ふべし
よきかたの世ありてはたかの地を幸ふべし
たかの地を幸ふべし
小幡勘定系方の紙布袋の新紙紙未の紙
おろし紙をたかの地を幸ふべし

一
一回てふ事有る事有る事有る事有る
伊豆屋の紙布袋の紙布袋の紙布袋
伊豆屋の紙布袋の紙布袋の紙布袋
伊豆屋の紙布袋の紙布袋の紙布袋
伊豆屋の紙布袋の紙布袋の紙布袋
伊豆屋の紙布袋の紙布袋の紙布袋
伊豆屋の紙布袋の紙布袋の紙布袋
伊豆屋の紙布袋の紙布袋の紙布袋
伊豆屋の紙布袋の紙布袋の紙布袋
伊豆屋の紙布袋の紙布袋の紙布袋

定方大急なひきつゝまゝに必定に相平も書きた
りし事いふにふしむの一事をえし遠くはる方所の
事よりつらひいひの事よりつらひいひ
てもふけしむるに難をすしあの中我
も海もつらひなるちし方たはち急な
事よりつらひなる事よりつらひなる
しるす何なる事よりつらひなる事
一葉のすふ方よりつらひなる事
海の中は此後書きたたの事よりつらひなる事
加しあけい事は合よもゆとてつらひなる
すらふ大急なひきつゝまゝに必定に相平も書きた
りし事いふにふしむの一事をえし遠くはる方所の
事よりつらひいひの事よりつらひいひ
てもふけしむるに難をすしあの中我
も海もつらひなるちし方たはち急な
事よりつらひなる事よりつらひなる
しるす何なる事よりつらひなる事
一葉のすふ方よりつらひなる事
海の中は此後書きたたの事よりつらひなる事



新編集卷之八終



Handwritten text in a cursive script, likely Japanese, is visible on the right page. The text is arranged in vertical columns and is partially obscured by two red square seals. The paper is aged and shows signs of wear.



